

---

## 編集後記

第6回日本医薬品情報学会総会・学術大会が、梅雨の合間の晴天に恵まれた6月21日22日の2日間松本で開催されました。学会長 山崎幹夫先生の市民講演、幹事の折井孝男先生、福井医科大学薬剤部長 政田幹夫先生の特別講演に続く一般研究発表によって医薬品情報の重要性を再確認した2日間でした。信州大学医学部付属病院の大森栄先生を始め薬剤部の先生方、お疲れ様でした。

本誌も、前号 Vol.5 No.1 より、表紙デザインを一新し編集方針を変更しました。本号からは毎号テーマを決めて編集を行うこととなりました。本号のテーマは「ジェネリックを考える」です。平成5年の厚生省薬務局に設置された諮問機関「21世紀の医薬品のあり方に関する懇談会」の提言において、「高齢化社会を迎え、国民医療費の増大が予想される中で、後発医薬品は低価格の医薬品の供給を通じて国民負担の軽減に資するであろう。また、後発品は医薬品市場の競争を促進し、医薬品価格の抑制に寄与するというメリットを有している。」と明記されています。その提言で示された条件整備の原則として、安定供給の確保、情報収集・提供体制の整備、品質・製造管理の徹底、などの必要性が指摘されています。本学会としても医薬品情報から見た後発品について真剣に考えていく必要があると思います。

(編集副委員長 岸本紀子)